（第3種郵便物認可）　毎日新聞　（夕刊）

世界一周から20年

求め続けた宝物 今手に

風

「ちっさいでしょう。こんなんで、よう世界の海を乗り切れたなあ……」。青木洋さん(四四)＝和歌山市＝は愛艇のヨット「信天翁Ⅱ」号の里帰りに目を細めた。

全長六・四メートル、排水量二・五トン。青木さんは一九七一年六月から七四年七月にかけ、この手製ヨットで単独世界一周をした。航海距離は六万五千キロ。最小の船による世界一周記録として今もギネスブックに残る。

航海後、青木さんは「信天翁Ⅱ」号を日本万国博覧会記念協会に寄贈、大阪府吹田市の万博記念公園に展示された。その船がいま修理のため、大阪府泉大津市の青木さんが経営するヨット販売・修理会社「青木ヨット」に戻っている。「かなり傷んでますね」。青木さんは、「Ⅱ」号との二十数年を懐かしむように思い出を語る。

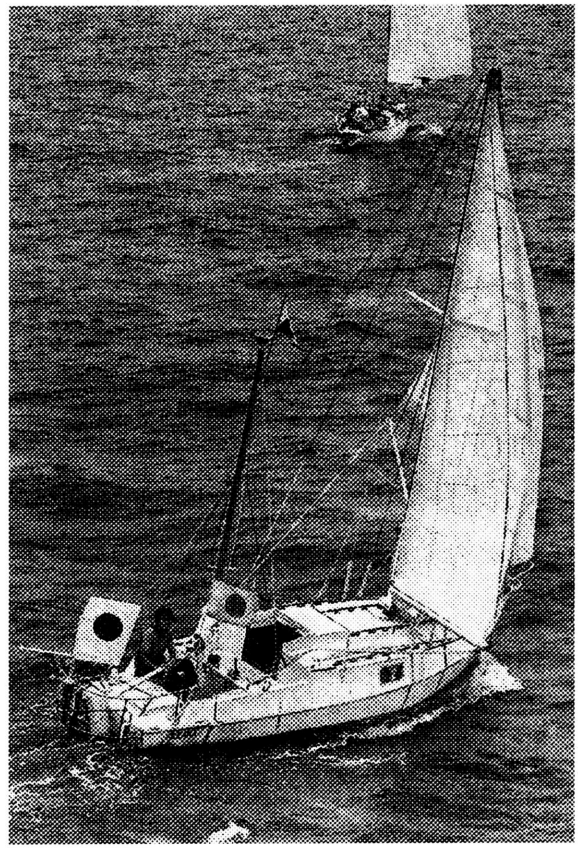
勉強に落ちこぼれた高校三年の夏。高石市の自宅近くの浜で沖を滑るヨットを眺めるうち、自分でも無性に乗りたくなった。手作りの「信天翁Ⅰ」号で大阪湾へ。次第に「自分の力で、遠く、知らない所へ」行きたくなり、「Ⅱ」号を約二年かけて完成。「何かを求めて」世界一周へ堺市の石津港を旅立ったのは二十三年前だった。

無線機も、方向探知機もないちっぽけな「Ⅱ」号は木の葉も同然だった。南米最南端のホーン岬沖では、三十数メートルの波にのまれて転覆、再度の波で奇跡的に起き上がった。帰港まで千百十二日。よくぞ、生きて帰ったと、青木さんは今、思う。

帰港後、自分を見失った。三年余、独りぼっちの孤独体験から、人間社会になじめなくなっていた。何が本当の自分なのかわからず、自らの殻に閉じこもり、友も失った。京都の寺で禅を続け、この状態から抜け出すのにほぼ六年かかった。

「何かを求めて世界一周の旅へ出た。でも、三年と一カ月半かけた世界一周でも、何も見つからなかった」。それが帰国後の青木さんを苦しめた。今、「あの世界一周で浦島太郎がもらってきた玉手箱の宝物が何だったのか、ようやくわかった」と言う。

立ち直った青木さんは「青木ヨット」を設立。自身の開くヨット教室で、初心者らと瀬戸内海などへセーリングに出かける。冒険とは違った海との付き合い。「あの航海で、ぼくは真っ裸の人間になった。身分とか、お金とか、男とか女とか、そんな一切から切り離された。丸裸で自然とふれあい、人の心をいやしてくれる海の力を、ヨットを通して、多くの人に知ってもらう。それがぼくの役目だとわかった」。青木さんは修理中の「Ⅱ」号をいつくしむように、そう言った。



世界一周を終えた青木洋さんと「信天翁Ⅱ」号＝1974年7月28日